

アパートの殺人

平林初之輔

青空文庫

一 前がき

外濠そとぼりに沿った電車通りに、山の手アパートという三層のビルディングがある。

地階は自動車のガレージになっていて、二階と三階とがアパートとして使われている。室へやの広さはまちまちで、借り手には、朦朧もうろう会社の事務所もあれば、某国大使館の書記官も居り、家族五人位で暮らしている者もあれば、独身者の会社員もあり、ダンサーが二人で一室を借りているのもあれば、終日蒼あおい顔をしてペンを走らせている無名作家もあるといった具合。

東京キネマの女優山上みさをもこのアパートの止宿人の一人であった。そして彼女が最近不思議な死をとげたのもそこであった。

簡単に言えば彼女は昭和×年三月——日、月曜日の午前十一時から午後六時までの間に、山の手アパートの自分の室のベッドの中で絞殺されていたのである。直接の手がかりは何にも発見されなかった。このことは誰でも知っていることだから、私はここで死体が発見された時の有様だとか、警察当局のとった紋切型の処置だとかそういう事柄はいっさい省

略して、すぐに関係者の証言にうつることにする。ついでに言っておくが、これらの関係者は、いずれも、死体の発見された即日引致^{いんち}取り調べられたのである。

二 神村進の証言

神村進は身長五尺八寸もある筋骨たくましい××倶楽部の野球選手で、年齢^{とし}は二十九歳。みさをの情夫である。彼は係りの警官の取り調べに対して大要次のように答えた。

.....

私が見さをの室へ行ったのは午前十時頃でした。前もって電話でそのことを知らしめたのです。

ノックをすると、中から、みさをの声で、

「鍵はかかってないわよ、はいりなさい」と言いましたので、私は中へはいってゆきました。

今日はちようど××球場で試合があったので、私は××倶楽部のユニフォームを着ていました。ポーチで靴をぬいで、カーテンをあけてみると、みさをはベッドの上に仰向けに

寝ていました。撮影のない日は、いつも十二時頃まで彼女は、寝ているのが習慣でした。もつとも、もう寝あきて、とうから眼をさましていたものと見えて、二つの眼を大きくあけて、宙を見つめながら、バットをふかしていました。うちにいる間は、朝起きるから夜寝るまで、ほとんど一分間の休みもなく、たばこ 煙をのむのがずっと前からの習慣だったのです。そして煙はバットに限られていたのです。近所の煙屋と特約しておいて、いつも五十入の箱をかってきて、いちいち箱をあけたり吸い口をつけたりするものが面倒くさいもんだから、一度に五箱位箱をあけて一本一本吸い口をつけて、それをボックスの中へ入れておいて、次から次へとつづけさまにふかすのです。

室の中はもちろん、煙がもうもうとたちこめていて、むせるようでした。

枕元には一尺に一尺五寸位なサイド・テーブルがおいてあって、（これはナイト・テーブルというのでしょうか、とにかく小型なテーブルなのです）その上には、桃色のシェードをかけた電気スタンドと、錫すず製の煙セットとが置いてありました。煙箱の中には、いま申し上げたように、二三十本の吸い口をつけたバットが、裸にして入れてありました。灰皿には、バットの吸い殻が、まるで焼跡の棒杭みたいに乱雑にうず高く積み重なって、まだその吸い殻からは盛んに煙がたちのぼっていました。そしてその吸い殻の中には敷島しきしま

の吸い殻が五六本まじっていました。平素バットばかりしか吸わない人だったので、敷島の吸い殻があるのは不思議だと私は一目見たときに思いました。

菓セツトのそばには、ナルコポン・スコポラミンの小瓶と注射器とが置いてありました。みさは、ずっと以前からナルコポンの注射をはじめて、いまではどうしてもやめられなくなっていたのです。何でもはじめは友達をしているのを見て好奇心にかられてやったのが、今ではすっかり中毒してやめられなくなったのだそうです。

それからこの薬品のそばに蜜柑みかんの紙袋が置いてありましたが、中味は大部分皮ばかりだったと思います。何でもナルコポンの注射をするとあとで咽喉のどがかわいてしょうがないというので、しょっちゅう蜜柑ばかり食べていました。よくあれで身体からだが黄色くならぬものだと思議に思ったものです。

床にはカーペットが敷いてありました。カーペットの上は埃でよごれて、電気スタンドの不必要に長いコードがうずを巻いており、その上や周囲には、紙屑や蜜柑の皮などが一面に散乱して、前の晩に眠るときに読んだものと見えて、二三枚の夕刊が散らばっていました。元来みさは、物もの臭くさな、だらしない女で、よくよく汚くなるまで掃除をせずにいるので、掃除といえbaumいつも普通の家の大掃除のような騒ぎでした。

ベッドの上はベッドの上で、ひどく乱雑に取り乱されており、裾の破れた友禅縮緬ちりめんの長襦袢じゆばんや、伊達巻だてまきや、足袋や、腰紐や、腰巻までも脱ぎすててのせてありました。掛け布団は近頃新調した、新しい錦紗きんしゃの布団でしたが、その下から毛布がはみ出して、だらりとカーペットの上へ垂れ下がっていました。こんなことを申し上げる必要があるかどうか知りませんが、あの女は、寝るときは、すっかり裸になって寝るのが習慣でした。どんな小さいものでも身体についていると、気になつて眠れないのだそうです。

こうした乱雑な室の、乱雑なベッドの中でみさをは、燃えるような真つ赤な顔をして、蜜柑をたべてはバットをふかしていました。真つ赤な顔をしていたのはナルコポンの注射のせいです。あれの注射をしたあとは、いつでもああいう風でした。そしてその時は本人は夢でも見てるようないい気持ちなんだそうで、いつもきまってひどくおしやべりになるのです。もっとも常からおしやべりの方ではありませんが。

私は室の中へはいると、先刻さつきも申し上げたように、真つ先に灰皿の中にある敷島しきしまの吸い殻が眼にとまりました。誰か来たのじやないかという疑いが起こったからです。別だん彼女のそぶりに変化が見えたというわけでもなかったのですが、どういうものか、私は、最近彼女の様子が少し変だという風に直観していたのです。私はこんな頑丈な身体からだをして

おりますけれど、ひどい焼きもちやきなんです。自分でもはずかしい程なんです。それに彼女の性質といい境遇といい、職業といい、いったん疑い出したが最後、疑う材料はいくらもあるんです。——で、私は、敷島の吸い殻が心配になってたまらなかつたのです。

「誰か来たんだね？」

私は、ベッドのそばに棒のようにつつたままたずねました。もつとも、何でもないうような、ごく冷静な態度を強いて装っていたつもりですが。

「いいえ」と彼女はバツトを口からはなしてはじめて口をききました。「誰も来やしないことよ、どうして？」

これがその日彼女の口から出た最初の言葉だったので。どうも変なんです。いつもはもつとやさしいんです。どうと云ってよく説明はできませんけれど、とにかくもつと柔らかな調子で、私をふわりと包んでくれるようなんです。それが今日は、はじめから、とげとげして、つつけんどんで、まるで私に食つてかかるようなんです。

「誰が来たつて悪いというんじゃないよ」と私はしばらくたつてから、ぽつりぽつり言いはじめました。「あんたのようなしようばいをしておれば、しよっちゅうお客のあるのは当たり前なんだから」

私は何でもなしに言ったのだけれど、みさをは、私の言葉が癩しやくにさわったのか、執拗しつようにだまりこくって蔑たはこばかりふかしていました。ちよつと見ると、まるで私の言葉なんか聞かないで、ぜんぜん別のことを考えていたらしいのです。よくそういうことが彼女にはこれまでもありました。

「ただね」と、私はついいらいらしたのでつづけて言いました。「僕は何もかくさないで有りのままに言つてほしいんですよ。そうすりや僕はどんなことでも理解もできるし、我慢するつもりだ。僕たちのような生活をして、双方で疑いあうということはたまらないことだからね。地獄だからね、それは」

「我慢する」という言葉の中には、たとえみさをにほかに男があつても打ちあけてくれさえすりや我慢するという意味だったので。実際そういう場合に我慢できたかどうかは知りませんが、その時はそういう気持ちでしたのです。

みさをは、少し私の言葉にかつとなつたものと見えて、クッションを肩の下にはさんで、上体を斜めに起こしました。さつきも申し上げたように、彼女は、いつも寝巻きも何も着ないで、すつ裸で寝る習慣だったのですから、起き上がる拍子に、肩から二の腕へかけて、布団の外へ丸出しになりました。二の腕にはナルコポンの注射のあとが一面に黒い斑

点になつて残つていたので、まるで橙だいだい々の上へインキをこぼしてそれをふきとつたように黒ずんでいるのです。それを見ると私は、いくら恋人でも、つい気味が悪くなつて眼をそむけたものです。

「誰も来やしないと云つたら、わたしの言うことを信じたらいじやないの」と彼女はやや気色けしきばんで言いました。「わたしの言うことが、あなたにはそれほど信用ができないの？ そりやね、女優なんてしようばいをしておれば、いづどんなお客があるか知れないわよ。それだけなことわつときますけど。でも、今日は誰も来やしないんです。来たものを来ないなんてあなたにかくしたつて、わたしに何の利益があるの？」

こう言つてしまうと、彼女は、横を向いて、つんとすまして、またバットをつまみました。

「だつてあなたはバットだけしかのまないんだろ？」

私は、眼の前にある灰皿の敷しきしま島の吸い殻が眼についてしようがないので、ついこんな言葉を口走つてしまいました。言葉が口の外へ出ると同時に後悔したんですが、もう追つきません。

みさをの眼がその時ちかりと光りました。きつと私を見下げはてた奴だと思つたにちが

いありません。彼女はナルコポンの効果で、紅く上気した顔を技巧的にくずして、甲高い声で笑いました。その笑いは私の腸にしみこむようでした。なぜって私の言った卑怯な言葉がはずかしかったからです。

「ああ、敷島の吸い殻がここにあるんで、あんたは疑ってるの、まるでシャーロック・ホームズのようなね？ そりや私だって、敷島は金輪際のみませんと神様に誓ったわけじゃないんですからね。どうかして袂たもとにまぎれこんでたり、誰か忘れていたりすりやもつたいないからすててしまやしないわよ」と彼女は雄弁に言いました。そしてわざとのように大きな欠伸あくびをして「困った坊ちゃんね」と口の中で言って、笑いながら私の顔を見ました。

正直に言いますと私は彼女が笑ったので驚いたのです。少しは怒っているだろうと思っただのですが、その時の彼女の笑いを見ると彼女はちっとも怒ってなんかいる様子はないのです。私にまごまごしていると、彼女はつづいて言いました。

「あんた、いい子だから今日はもう行ってちょうだい！ 今日試合があるんでしよう。もうぼつぼつ練習がはじまるわよ。またグラウンドでわたしのことなんか思い出してエラーをしちゃいけないことよ」

こう言いながら、彼女はまるで気兼ねでもするように、ちよつと横を向いて手をのばし

ました。私はすっかり気持ちをなおして、その手にキッスをして出てゆきました。

それから球場へゆきましたが、行く道々私は、「やっぱりみさをは私を愛しているんだ。私一人を愛しているんだ。それを愛に疑ったりしてすまんことをした。試合がすんだら帰りがけに寄ってあやまろう」と考えつづけていたものです。

試合がすむと、私は用事があるからというのでみんなと別れて、タクシーでかけつけて真つすぐにみさをの室へ飛んでゆきました。階段の上がり口で、植田欣子きんこさんにあいまして、何を言ったかわねられたかも夢中で、あれの室へかけていったのです。

ノックを試してみたが返事がないので、扉ドアを押すとあきましたから、中へはいってみると、薄暗がりだのにまだ電気もついていないのです。スイッチをひねってみると、彼女は、頭から布団をかぶって寝ているらしいのです。不意におどかしてやろうと思って、私は靴をぬいで、そつと枕元へ行つて、揺り起こそうと思つて手をやろうとすると、毛布の端からまっ蒼さおな彼女の額が見えるのです。彼女はもう冷たくなって死んでいたのでした。

それからあとのことは皆様のご承知のとおりです。十一時前に私が出るときはたしかにみさをは生きていました。そして六時前に帰ったときは、もう死んでしまつたあとでした。それにちがいません。

三 村井保の証言

村井保は、映画雑誌、シネマ時報の編集主任で、年齢は三十四歳、雑誌記事のことで、東京キネマのスタジオへ出入りしているうちに山上みさをと知り合いになり、半年ほど前から彼女と情事関係をむすんでいたものである。

.....

私が、山上のとこへ行つたのは十時少し前でした。ノックをすると五分間ほどしてから彼女が扉をあけてくれました。寝ているところを起こされたせいか少しどぎまぎしているようでした。何しろ長襦袢をひっかけたまま、細紐もむすばずに扉をあけてくれて、私がポーチで靴をぬいでいる間に、すぐベッドへひきかえして、裸のままベッドの中へもぐりこんでしまいました。室の様子は、神村という人の陳述と同じでした。何しろひどく乱暴にちらかしてありました。

私が隅っこに寄せかけてあつた籐椅子をひきずり出して腰をかけようとすると、彼女はあわてて、低声で私に言いました。

「いまね、野球選手のファンが電話をかけてきて、すぐ来るといふことだから、あんたすまないけれど隣の室がぁいてるから、そこへ行っててくれない？ よく日の当たるあつたかい部屋だから、しばらく我慢しててね。すぐ帰すから」

「艶つやっぽいところを隣から指を食わえて聞かされちやたまらないよ」とじょうだんを言いながら、私は隣の室へ行きました。そのまま帰ってもよかったですけれど、何だかあつ気なかつたので、あとでゆつくり会おうと思つて、待つていたのです。

私が出てゆきがけに彼女は独り言のように、

「あああ、いやになつちやうな」

と吐き出すようにつぶやきました。きつとつまらないファンとの応接などで、私とのラubeーを妨げられたことが癩しやくにさわつたんでしよう。

それから三分とたたぬうちにその野球の選手がみさをの室をノックしているのが聞こえました。それが無論、あとで知つたのですが神村なのです。

二人の話はときどき隣の室へきこえましたけれど、私は別だん立ち聞きするつもりもなかつたので、何を言つてたのか、何をしていたのかわかりません。とにかく二十分ほど、がらんとした空室あきべやの中へ靴のまま上がつて、窓まど框かまちに腰をかけて待つているうちに神

村は出てゆきました。

ちようどその時に、三つ四つおいた室から蓄音器のジャズが聞こえてきました。その室ではしよつちゆう蓄音器ばかりかけているので、うるさいたらありませんでした。みさをは低声こゝえで、蓄音器にあわせて、「なーにがなーんだかわからないのよー」なんてうたっていました。そういう無作法なことは平気でやる女でした。

それから一分ほどしてから、

「ミスタ・ムライ・カミン」

と笛のような声で私を呼びましたので、私はゆっくりわざとぐずぐずして彼女の室へはいつてゆきました。

私のその時の服装ですか、いま着ているこの茶ちや縞しまの背広の上に、このオーバー・コートを着ていました。髪も今のとおりのオールバックにして、髭ひげはきれいにそっていました。靴もやつぱり今はいているエナメルの靴で、買ったてのようにきれいにみがいてありました。

「お安くはないね、二十分も寢室で密談するなんて？ ファンだなんて、あやしいもんだな」
むろん私はじようだんにそんなことを言ったのです。私は彼女がほんとうに愛してるの

は私だけだということは以前からずっと信じていたし、今でも信じているんです。ことに相手が野蛮な野球のチャンなんかでは、真面目にからかうのさえ、こけん 沽券にかかわるとさえ思ってたんですから。

「××倶楽部の捕手キャッチャーをしてるのよ。知ってるでしょうあんなだつて。ずいぶん野球はおすきなんだから」

「そうか、あの男か、あれが君のファンとは驚いたね。あの無骨な男が、映画女優のアドマイヤラー「恋人、求婚者」だなんて、可愛いところがあるね。とても熱心らしいじゃないか？」

私は苦笑しながら言いました。苦笑いなんかしまいと思つても、ひとりでに唇がまがるもんだから、仕方なしに笑うのです。

「ええ、とても熱心よ。それに、無邪気で、人がよくつて、親切で、正直で、飾り気がなくつて、男性的で、わたし大好きよ、ああいう男は」

みさをがやけにその男のことをほめるので、私は弱りました。一体、自分の前で別の男のことをほめられるということは、私のように、自信の強い人間にはとても苦手なんです。その点私は女のような性質をもっていると自分ながら思つてるのです。しかもみさをの言

葉は、いちいち私の弱点をついてるんですからね。向こうじゃそんなつもりじゃなかったのかもしれないけれど、少なくとも私にはそうとれるのです。ことに男性的という言葉で他人のことをほめられるのが私にはいちばん閉口でした。なぜって、ご覧のとおり私は、こう言っちゃ何ですが色男タイプの方で、男性的じゃないんですから。

「うるさいもんだね、女優なんてしようばいは、ああいう男にいちいち相手になつていきやならんとなるよ」

私はこん度は、まるでそんな男のことは齒牙しがにもかけていないといった風に高飛車に出ました。彼女は蜜柑みかんを食べながら私の顔もみずに言いました。

「でも面白いこともあつてよ。いやいや相手になつているんだとうるさいけれど、すきで、面白くて相手になつている分には、かえって気ばらしになつていいことよ」

私は彼女が横を向いて蜜柑を食べているのを見ると、急にいらいらしてきました。ベッドの足の方の端に腰をかけて、じつと彼女の顔を見つめていたんですが、彼女は、まるで私のいることなんか忘れたように、動物が草を食うようにして、せっせと蜜柑を食べているのです。

はずかしい話ですが、その時、私ははじめて少し自信がぐらついてきました。私のこと

きは彼女にとって物の数でもない存在じゃないのかしらん、彼女にはほかに二人も三人も愛人があって、私はその中のほんの端役はやくをつとめているに過ぎんのじゃないかしらんというような有り得べからざる幻想が、ちらちらと浮かんで、胸がちくりと痛んでくるのです。もちろんそんなことは断じてないんです。彼女は私以外の男性を愛したことなんか絶対になかったことを私は誓って申し上げておきますが。でもその時は私はどうかしていたのです。

「だが、別に何だろうね、何もありませんよ、あんな男と？」

と私はしどろもどろにどもりながら彼女の顔をじっと見おろして言いました。

彼女は、今度はゆっくりバットに火をつけて、大きくふかしてから言いました。

「何もっていうと？」

「つまり別に関係なんかももちろんないだろうてこととき、もちろんのことだけね」

「そりゃ女優がファンにいちいち関係までしてた日にゃ、身体からだが十あったって足りやしな
いわよ。そんな人は、誰にだつて一人しきやないことはきまつてるじゃないの」

やっぱり、みさをの愛している男は私だけだったのです。一人てのはもちろんわたしの
ことなんですから。

私はみさをか急にかわいくてたまらなくなりました。あわれっぽいような気持ちがあるのです。私一人をたよりにしてるんだと思うといじらしくなるんです。ことに彼女が布団の上へだらりと出している二の腕のどす黒い注射のあとを見るとかわいそうで、胸がせまってきました。

「あんたまだ注射をやめないんだね」私は彼女の腕の地肌を見ながら、しんみりとした調子で言いました。「毒ですよ、それだけは是非やめてほしいね、僕のために。僕みさちゃんが必要なことをしてるのを見ると、わざと自分で自分の身体をこわしてるような気がしていじらしくてしょうがないんだ」

「そりゃ、わたしもやめたいのよ、でもこんなにくさくさしちややらずにやおられないのよ」

「ほんとに身体だけは丈夫にしてくれないと困るね。葎たばこだってあんまり量が多過ぎやしない？ そんなにしよつちゆうふかしどおしじや？」

私はベッドの端から腰を上げて、無言のままですかずかと枕元の方へ歩いてゆきました。そして、両腕をのぼして、彼女の白粉おしろいのはげた頸くびのあたりをぎゅっと抱きしめようと思いました。

すると今まで上ずった眼で宙を見つめていた彼女は、急に気がついて、

「いけない!」

と鋭い声で叫んで、私をはげしくはねのけました。その拍子に彼女の裸体の上半身が、鼠色の毛布の中からゆつと出たのをはつきりおぼえています。

私は驚いてしまいました。腹が立つひまもなく、これは変だと思いました。こんなに頑強に彼女が私を追っ払ったことはなかったのです。いつでも私のするままにさせて逆らったことのなかった女です。それが今日はどうしたものか、まるで毛虫か何かのように、私の手が彼女の肉体に少しでも触れるのを許さないので。汚いものようにはらいのけるのです。

でもしばらくすると彼女はあんまりだったと思いなおしたのか、あつけにとられている私を見て、

「保^{たも}ちゃん、今日はもう行ってね」

と言ったかと思うと、すぐに頭から布団の中へもぐりこんでしまいました。

実に解しかねる行動じゃありませんか。私は、しょんぼり室^{へや}の中に立ちつくして、もてあました駄々っ子に口をきくように言いました。

「みさちゃん今日はどうかしてるんだね」

みさをは何とも返事をしませんでした。

その時ふと見ると、布団の端から寝台の横の方へ軋のような彼女の左の足首が出ていました。私はしばらく、不思議なものを見るような気持ちでそれを見ていました。実際、顔も身体からだも見えない女の足首だけが夜具の中から出ているのは不思議な眺めです。そして、たまらなく淫いんとつ蕩とう的なんです。

いきなり、私はその場にひざをついて、その足首をぎゅっと両手で握りしめました。すると不思議なことには、彼女は今度はちつとも抵抗しないんです。私は彼女はきつと、わざと私の眼の前へ足を出したんだなと思って、親指のあたりをねらってちゅつと接吻をしてやりました。ことわっておきますが、私が彼女の足に接吻したのはそのときりじやないので、少なくとも私たちにとっては不自然な行為じゃなかったのです。

私が唇と一しよに手をまわすと、彼女はだまって、おとなしく足をひっこめてしまいました。

それっきり、私はだまって出ていったのです。その時はちょうど十一時でした。

四 松木久作の証言

○〇製菓会社常務取締役松木久作は、年齢^{とし}五十歳のでつぶり太った紳士で、つい一ヶ月前から、東京キネマの重役某の紹介で山上みさをのパトロンとなっていたのである。

.....

私は昨夜^{ゆうべ}、一時前にみさをのところへ来て今朝^{けさ}まで泊まっていました。みさををの面倒をみるようになってから、日曜の晩にはずっと泊まってゆくことになっていたのです。もちろんそのほかの晩にも来ましたが、たいてい一時前には帰ってしまうことにきめていました。

今朝眼がさめたのは九時頃でした。みさをはまだ眠っているようなので、起こすのは気の毒だと思って、昨夜眠りがけに読んでいた毎夕と読売の夕刊を床^{とこ}の上でひろげて読んでいましたが、さびしくなったので、彼女をそつと起こしてやりました。

みさをは眼をさますと、しばらく頭が痛いと言って不機嫌でした。いつでも朝眼がさめたときはあの女は不機嫌なんです。

でもしばらくするとベッドの上で起き上がって、脚を布団の上へ出して、股のあたりへ、

ナルコポンの注射器をさしていました。はじめのうちは、私も口を酸っぱくしてとめたんですけれど、ほかのことは私のいうことは何でもききました。あれだけは、どうしてもきかないもんですから、近頃はそばで見てもとめもしなかつたんです。

それからかれこれ三十分も温かいベッドをはなれかねて、二人で蓆たばこをふかしながら話をしていました。あれはバットばかりしかすわれないし、私は敷しきしま島以外の蓆はどうしてもいやなんです。

するとボーイが扉ドアの外から、あれに、山上さん電話ですよと知らしてきました。しばらくするとあれが帰ってきて、もう三十分もすると、人がくるから、はやく起きてくれというのです。私は時計を見ながら、三十分もあればまだ大丈夫だと思つてしばらく愚図々々していると、そのうちに廊下にノックの音が聞こえるのです。

私ははつとびっくりしてとび起きました。するとあれはあわててとめて、もう間にあわんから、きゆうくつだけどしばらく、ここへかくれてくれと言つて、ベッドの壁際へ私の身体からだをおしやつて、その上を毛布でくるみ、上から布団をかけてくれました。それから、あれは大急ぎで、毛布や布団をとりつくろつて、私のいることがちよつと見たのではわからんようにしている様子でした。それから、私のぬぎすてておいた洋服や、帽子や、

靴やを、あわてて押し入れの中へしまつて、

「しばらく我慢しててね」

と低声こごえで言いながら、扉を開けにいつて、すぐ引きかえして、自分もベッドの中へはいりました。

私の身体は藁わら布団と壁との間の溝の中へはまっているので、背中が痛くてしょうがありませんでしたが、それから二人の男が帰つてゆくまでじつと辛抱していました。

村井が十一時頃に出てゆくと、みさをは、毛布の中から顔を出して、大急ぎでバットに火をつけて、せかせかたばこ糞をふかしていましたが、足音が聞こえなくなると、

「もういいわよ」

と言つて布団をはねのけてくれました。

私が起き上がるとあれは、私の首つ玉へ抱きついて額や、眼や、頬ぺたや、もうそこらじゅうにキツスをするのです。

「すまなかつたわね、こんな窮屈な目をさせて、ごめんなさいね」と言いながらも、雨のようにキツスをあびせました。

「あんな連中に一々あうのを断ることはできないのかね？」

私はちよつと眉の根に皺しわを寄せて聞いてやりました。

「断れば断るでまたうるさいんですからね。あとから来たのは、シネマ時報の記者でしょう、機嫌をそこねると出鱈目でたらめな悪口を書きなぐるんです。そうすると自然ファンの人気は落ちるし、そうなりや会社の方だつて気まずくなるつてわけで、ほんにこんなしようばいはいやになつちやうのよ」

「はじめの男は何だい、野球の選手とかいうのは、ただのファンにしちや、あんまりなれなれしすぎるじゃないか？」

「ただのファンなんですけれど、あんなしつこい子つたらありやしないのよ。奉天へ巡業に行つてるときに、ちようどあの倶楽部が向こうへ試合に来てて、あちらのあるカフエではじめてあつたんですがね、その時ブロマイドをせがむもんだから、一枚くれてやつたら、それを今でも後生大事にもつてその後手紙をよこしたり、たずねてきたりして、うんざりしちやうのよ」

聞いてみればなるほど無理はないんです。女優なんて人気しようばいだから無暗に人の機嫌をそこねちやたちゆかないことは、私にもよくわかるんですからね。

何しろ、あれは、親と娘とほど年齢としのちがう私がすきですきでたまらん風でした。私も

あんな風に女に愛されたことはなかったの、眼の中へ入れてやりたい程かわいくなってきたのです。たった一月の間に、あれにはかれこれ四千円も金をかけましたからな。それでもちつともおしいとは思わなかつたもんです。今でもそうは思つとらんですよ。いったい私どものような実業家は、どんな場合にでも算盤そろばんにあわないうような金の費つかい方はしないもんです。だがあれの場合は全くけたはずれでしたよ。もう金銭けんずくじやないんです。で今朝けさも……いえなに、まあそういつた具合で、お互いに別れをおしんで別れて出ていったんです。今夜あんな姿になつていてのを見ようとは夢にも思わなかつたのです。時刻ですか、私が出たのが十二時少し前でしたね、たしか。もちろん生きていましたとも。「左様なら、また今晚もぜひ来てね」って、私のこの手にキッスしてましたからまあ。

五 植田欣子の証言

山上みさをは、以上の三人の証言によつて、三月——日午前十一時までは生きていたことが証明されたわけである。村井が帰つたのが十一時で、そのあとで、松木久作が山上にあつてゐるのだから。だが松木久作の証言のように、十二時少し前まで山上が生きていた

ということは松木だけの証言では証明されたとは言えない。というのはその後山上の生き残りをみた人は誰もいないからである。そして少なくとも午後六時までは、山上は死んでいたことは神村進の証言によつて証明されたわけである。

植田欣子は山上みさをとほぼ同年輩でやはり、東京キネマの女優である。彼女はみさをととても親しい、友人以上の間柄であつたと言われていた。みさをの室の左側の隣の室を借りて住んでいたのである。ちなみにみさをの室の右隣の室は空いていたのである。彼女が警官の訊問しんもんに対して最初答えた言葉は簡単ではあつたが、非常に重要なものであつた。

.....

みさちゃんわたしとは人に羨まれるほど親しい間柄でした。年はおない年でしたけれど、わたしが、世話をしてあの人を、東京キネマへ入れた関係もあり、あの方はわたしのことを、ねえさんといつて何でも、わたしにだけはうちあけて相談してくれていました。ええ、神村さんのことも、村井さんのことも、松木さんのことも、みんな知っています。わたしには、何でも話すんですもの。あの方は、男のことにかけてはだらしのない人で、まあ、誰でもかまわないといつた態度でした。で、いまのどこ関係している人はあの三人きりのようでしたけれど、以前から、あの人と関係した人つたら、わたしの知ってるだけ

でも十二三人はあるでしょう。そうですね、三人のうちで誰をほんとに愛していたかつきかかれるとちよつと困りますけれど、わたしの考えでは、神村さんが一番好きだったんじゃないかと思えます。関係した月日もいちばん長かったようですし、神村さんには、全く欲得はなくてほれていたようでした。といつても、ああいう人ですから、誰が一番好きだとか、誰のためになら命もいらぬとかいうようなことはなかったのじゃないでしょうか。松木さんとは、お金でできた関係だったのですけれど、だからといって、義理であの方の相手をしているというわけでもなく、つきあってみれば、なかなか親切で、いい人だと自分でも言っていました。村井さんにしてもはじめは、多少功利的の考えもあつて、交際をはじめたのですが、近頃では「少しきぎなところもあるけど、とてもいいところもあつてよ」なんてたくらいですから、まんざらでもなかつたと思います。

今日はわたしはあの人には一度もあいません。何でも随分お客があつたようでした。今日あの人の室へ出入りした人ですか、それは、神村さんと、村井さんとしきや知りません。神村さんには、六時頃、あの人が野球のユニフォームの上へジャケットを着て階段をあがつてらっしゃるところで会いました。「どうでしたの勝負は？」ときいても、まるでわたしの言葉が耳にはいらぬ様子で、急いで通りすぎていきました。それからあの人が見

さちちゃんの死体を見つけてあの騒ぎになったのです。そうですね、その間に五分間もたちましたでしょうか。

村井さんは、わたしが屋上から、洗濯物をとりいれて帰ろうとするとき、みさちちゃんの室^{へや}を出てゆく後ろ姿を見ました。後ろ姿でよくはわかりませんが、何でも、ひどく急いでらっしゃるようでした。時刻ですか、はつきりおぼえてはいませんが、三時頃だったと思います。いいえ十一時なんてことはありません。わたし今朝^{けさ}は九時におきて、銀座へ買い物に出かけて帰ったのが一時半頃でしたもの。それからだいぶ時間がたってましたから、かれこれ三時にはなつてたと思います。たしかに間違いありません。ええ、もうそれは村井さんにちがいません。決して人ちがいじゃありません。

六 ボーイ鷺尾の証言

植田欣子の証言によって、シネマ時報記者村井保は、三時頃に被害者山上みさをの室を出ていったことがわかった。しかも、村井は第一回の取り調べの時に、警官に、そのことを自白しなかったのである。これによって、村井に対する疑いが濃厚になってきたのであ

るが、それと同時に、山の手アパートの食堂のボーイ鷺尾によって、いま一つ有力な証言がなされた。彼が警官の取り調べに対して答えたのは、次の一つの事実だけだった。

.....

私は、今日の午後三時頃に、松木さんが、山上さんの室から出てゆかれるところを見ました。松木さんは、近頃よく山上さんのところへいらっしやったから顔はよく知っています。まちがいつこはありません。時刻は正確とは言えませんが、たしか三時頃です。三時少し過ぎてたかもしれませんが三時前つてことはないと思います。松木さんの方では私には気がつかれなかったようでした。私は、左側の廊下から、食堂の方へ通ずるパセージ〔通路、廊下〕から横に見ていたのですし、それに松木さんは、その時、たいへん急いでいらっしやるようでしたから。

七 村井保の第二回目の証言

恐れ入りました。（と村井保は、係官の第二回目の峻しゅんげん厳げんな訊問しんもんに対して、頭をうなだれ、声をふるわして答えた）すっかり申し上げます。午後三時少し過ぎに、みさをの

室から出ていったのは、たしかにわたしに相違ありません。ちょうどあれから社へ帰ってみると、みさをついての面白い原稿がきたので、次号に、その記事を出すついでに、彼女の写真を口絵に一頁大で出すことにきめましたので、そのことを知らせたり、その原稿を見せたりするために、やってきたのでした。

扉^{ドア}をノックしてみると、返事がないので、まだ眠ってるのじゃないかと思って押してみると、ひとりでに開きました。上がり口から見ると、彼女は、ちょうど今朝私が出ていったときと同じように、頭から布団をかぶって眠っているらしいのです。

私は「みさちゃん」と二度よんでみましたが、返事がないので、きつと狸寝入りをするんだらうと思つて、そばへ寄つて、頭にかぶっている布団をあげてみました。すると、まっ蒼^{さお}な顔をして、白い眼をむいている様子がどうも変なのです。肩へ手をやって揺すぶってみると、まるで手ごたえがなく、揺すぶられるままになっています。死んでいるなど、その時私は思いました。懐へ手を入れてみるとまだ温か味はありましたが、もう死んでいるに相違ないのです。私はすぐに事務所へ知らせようと思つて、ひよいと枕のどこを見ると、古代更紗^{せいら}の二つ折りのクツシヨンの間から、紙切れの端が見えるもんですから、何だらうと思つて抜き出してみると、今朝^{けさ}の日付の小切手なんです。振出人は松木さんで、

額は五百円で、銀行は××銀行の牛込支店でした。

私はいったん、その小切手をもとの場所へはさんでみましたが、どうも誘惑に勝てないんです。本人は死んでしまっているんだから、今その小切手を銀行へもって行って現金にかえてしまえば、誰も気をつくものはない。そう思うと私はもう悪魔のような気持ちになってその紙切れをポケットの中へつつこんでしまいました。そして、死体にはもとのとおり頭から布団をかぶせて、そつとみさをの室を出ていきました。幸いにも帰りがけには誰にもあわなかつたので、その足で、××銀行の支店へ行つて、いい加減な住所に村井八太郎という名前を書いて、私の認めをおして、金を受けとつてきました。その金はまだすっかりここにもつています。

いま申し上げたように、三時にみさをの室から出ていったのは私に相違ありません。そして、あの人の小切手を盗んだのも私に相違ありません。けれども、みさををは、その時にはもう死んでいたのです。決して私が殺したんではありません。それにあの人は身体からだのどこにも傷を受けてはいなかつたんですから、私は殺されたんじゃなくて死んだのだろうと思つていました。

「ナルコポンの注射のあとでお酒をいただくとすぐ死んじやうそうよ」なんてみさをが

つか言っていましたから、そんなことで、ついうっかりして薬のせいで死んだのじゃないかと私は思っていたくらいです。絞殺されたのだというようなことは、いま聞くのがはじめてなんです。

八 松木久作の第二回目の証言

先程お取り調べのときに、よつぽどそのことも申し上げようと思ったのですが、つまらんことばかりあいになつちや、馬鹿な話だと思つてやめたのでした。

実は今朝、みさをとわかれるときに、あれが、追々春になってくるのに、春のしたくができないからというので、五百円の小切手を書いてわたしたんです。さあどこへしまつたか、私がかえるときは、まだ、枕元においてあつたように思います。

それから私はちよつと会社の方へ顔をだしたんですが、どういふものか、ふつとあれのことが心配になつてきたのです。いったい私は何か気にかかることがあると、それをたしかめてしまわんと、何も手につかん性質でして、さあ心配しだすと、もう落ちついていられないのです。そのときまでそんなつまらない考えを起こしたことはなかつたんですが、

今朝けさのように二人も男がたずねてくると、はたして私は安心しててよいかどうか迷ってこざるを得なくなつたのです。何にしても三人のうちでは私がいちばん年をとっている。そして、こう言つちや何だが、お金の融通のできそうな男は私より外にはない。私は、ただお金をしぼりとるために、ちやほやされてるんじゃないか、そして他の若い男とうまくやつてるんじゃないかと気づかわれてくるんです。

もう一度あつて、よく本心をたしかめておこうと、こう思つて、会社を出たのが三時少し前でしたから、向こうへ着いた時は、三時少しまわつていたでしょう。

みさをの室へやへはいつてみると、別れたときそのまままだ眠っているらしいのです。昨夜ゆうべは二人とも、あまり眠らなかつたので、眠りが足りないもんだから、床の中にぐずぐずしている間に、また眠くなつたんだろうと思つて、そばへよつて揺り動かしてみると、どうしても起きないんです。で掛け布団をまくつてみると、あの子は、もう息がたえているのです。かわいそうなことをしてしまいました。

けれども、考えてみると、今朝一番あとであの子の室を出たのは私です。そしていま、あれが死んでそのままになつてるところをみると、その間に誰かの手にかつたには相違ないのですが、このアパートの人も誰一人そのことを知らない。とすると犯人はたく

みに逃げてしまったに相違ない。してみると、ぐずぐずしては、自分に嫌疑がかかると思つたもんですから、急いで、出てゆこうとしましたが、ふと気がついて、小切手なんかをのこしておいては、それから足がついて取り調べられるといけないと思つたもんですから、ひきかえして、そこらじゅう探してみました。何しろ、こちらもあわてていたので、見つかりません。それで、見つかったら、何とかごまかしておくことにきめて、出ていったわけです。

どうして殺されていたことがわかるって、それは、咽喉のどをしめられていたからです。咽喉のところが、少し青くなつて、かすれ傷ができていました。あんなことのできるのは、力の強い、若い男にちがいありません。

九 植田欣子の二度目の証言

ええ、わたしは、ふだんみさちちゃんの室へやへは、しょっちゅう出入りしてました。前にも申し上げたようにあの人は、わたしをねえさんねえさんと言つて、私たちはまるで姉妹みたいにしてましたから。

今日も実は、たった一度きりあの人の室へ行きました。銀座で買い物をして帰ってから、隣から壁越しに「みさちゃんまだねてるの？」ときいてみると、

「ええ、遊びにこない？」って返事なんです。

「行つてもいい、迷惑じゃない？」

と言いながらわたしははいつてゆきました。みさちゃんはベッドの上へ起きあがって、股へ注射をしているとこでした。

「またあんたそんなことをしてるの？」

とわたしはにらみつけてやりました。わたしはあの人の身体からだのためを思つて見つけるたびにとめるんですけれど、どうしてもやまないんですね。

「ごめんなさい、ねえさん」とみさちゃんは眼に涙をためているので、わたしもかわいそうになつてきました。「今日はこれで二度目なのよ、わたしもう生きてるのがいやになつたから、どうなつてもいいの」

「どうかしたんじゃないの、そんな乱暴なことをして、やけなんかおこしちゃ困るじゃないの？ 明日は筑波山へロケーションに行くんでしょう。あんたが行かなくなっちゃしようがないじゃないの？」

「ねえさん」とあの人はやっぱり泣き声で言うのです。「わたしもう松木のおやじと別れるかもしれないのよ。だってあんまり凶々しいこと言うんですもの、わたしの身体を一人で買い占めたような気になって、つけ上がるんですもの」

「どうしたの一体？」とわたしは、ベッドのはしへ、あの人と並んで腰をかけて、右の手であの人の肩をだいてきいてみました。

「今朝^{けさ}帰りがけにね、わたしにこのアパートを出てくれって言うんです。そして別に家をさがしてやるから、そこへ引越してくれって言うんです。ここは誘惑が多くていけないんですって、あのおやじより他の男にあっちゃいけないんですって？ その代わり生活の方は不自由のないように保障するから、今後、他の男と秘密でもあつたりしたら、ただではおかないんですって。きつと殺すつもりなんでしよう」

あの人はひどく興奮して、わたしの胸にもたれて、くやしそうに泣きじやくってしました。

「四千や五千のはした金で^{わたし}妾をすっかり自由にしたつもりでいるんでしょう。妾もうすっかりいやになっちゃったのよ。でもう別れちまうことにきめたの。その時は、あのおやじに離れたら、またお小遣いに不自由しなきゃならないと思つたもんですからしばらく考え

さしてくれと言つてやつたら、ではもう二三時間まつが、三時になったら返事をききにくるから、それまでに考えといてくれつて言うの、もうすぐ来るでしょう。来たらわたしこゝとわつてやるつもりなの。あのおやじのおめかけになつて、監視をつけられた日にや、第一、進（神村進のこと）とあえなくなるでしょう。わたし、あの子と、もうすっかり約束がしてあるんですもの」

それから松木さんが来るというもんですから、わたしはみさちゃんの室へを出て、その足で屋上へ、ハンカチの洗濯したのをとり入れにいつて、その帰りがけに、さつき申し上げた通り、村井さんがみさちゃんの室から出てゆくのを見たんです。そうですね。屋上には二十分もいたでしょうか。天氣がよかつたもんですから、風に吹かれて、あたりの景色をながめていたのです。時刻は二時過ぎだつたと思います。

一〇 最後の対質訊問

臨検の検事は、以上の各容疑者を、最後に対質たいしつしんもん訊問したが、その訊問の要点は次のようなものであつた。

.....

検事（村井に向かつて）「君は、小切手を盗んだときにもう被害者は死んでいたというが、君が、殺して小切手を盗んだんだろう」

村井「いいえ、たしかに、みさをはその時はもう息がたえていました。前に申し上げたとおりに相違ありません」

検事（松木に向かつて）「君の陳述はだいぶ事実と相違しているね。最初君は山上のアパートを出るときに、山上にあのアパートから引越してくれと言ったなんて話はしなかったが、植田の証言によると、君は被害者を脅迫してるじゃないか」

松木「恐れ入りました」

検事「植田の言ったことは事実か？」

松木「はい」

検事「山上に、他の男とあつたらただではおかんとたしかに言ったのか？」

松木「左様なことを言ったかもしれません」

検事「かもしれないじゃなくて、はっきり答えろ。たしかに言ったんだろう」

松木「はい、たしかに申しました」

検事（神村に向かつて）「君は山上と結婚をするような約束をしたことがあるか？」

神村「はい、永久に離れまいと約束をしました」

検事（再び松木に向かつて）「君は、正午に山上と別れてから、二時頃に引き返してきて、山上が、君の申し出でを拒絶したので、他に男のあることを知って、嫉妬のあまり山上を殺したんだろう」

松木「いいえ、私が二度目にその返事を聞こうと思って来たときにはたしかに、あの子は殺されていました」

検事「生まれ、ただではおかんと君が被害者に言ったのは、たしかに殺すつもりで言ったのだろう」

松木「ちがいます。その点は、前に申し上げたとおりで、私があの人（へや）の室へ行ったときはもう殺されたあとでした」

検事（欣子（きんこ）に向かつて）「貴女（あなた）は、被害者山上と、姉妹のような仲だったというが、世間の噂では、姉妹以上の仲だったということだが、それは事実か？」

植田（顔を赧（あか）くして）「……」

検事「貴女は、前には村井が被害者の室を出ていったのは三時だと言い、二度目には二

時過ぎだと言ったが、どちらがほんとうなのか？」

植田 「はつきりおぼえていなかったものですか……」

検事 「最初の取り調べの時に、なぜ今日山上とあったことをかくしていたのだ？」

植田 「疑われると思ったものですから」

検事 「あなた貴女は、被害者山上が、神村を愛していると聞いて嫉妬を感じたんだろう。同性愛というものは、ある場合には異性愛よりも強いものだということを聞いているが、愛が強ければ嫉妬もまた強い道理じゃないか。嫉妬に眼がくらんで、女にも似合わざる大胆不敵な凶行を犯したんだろう」

植田 「……」

検事 「どうだ、だまっついてはわからぬではないか？」

植田 「すっかり申し上げます。実は、わたしとみさちゃんとは、お察しの通りの仲で、二人で無断では結婚しまいと約束していたのでございます。二人はほんとうに愛しあっていたので、そのために、わたしにしても、みさちゃんにしても、異性に対しては、本気に愛しあうことができなかったのでございました。二人のうちのどちらかが、無断で、男と結婚するようなことがあったら、どんな復讐をしてもいいということにきめていたのでご

ざいます。ところが、今日、みさちちゃんの口から、神村さんをほんとうに愛しているという告白をきいて、わたしは、もう理性を失ってしまったのでございます。

わたしは、もうくやしくて、くやしくて、思わず、あの人の咽喉のど首へしがみつきました。するとあの人は大きな声を出しかかったもんですから、つい、わたしは何もかもわからなくなつて、両手を、あの人の咽喉のそこへあてて、寝台の上へぎゆう、ぎゆうおさえつけたんです。そして、ふつと気がついて、手をはなしてみると、あの人は、もう白眼しろめをむいて、ぐつたり、頭をうしろへ垂らしてしまつたんです。わたしは思わず、ぎよつとしてしまいました。その場にいるのが恐ろしくなつて、急いで廊下へ出て、屋上へかけあがつて、冷たい風で頭をひやしました。それから、自分のしたことの意味がやつとのみこめてくると、下へ降りて、もう一度みさちちゃんの室へやへ行つて見てこよう。あれくらいのことです。死んでしまうわけはなかうと思つて、下へおりてみると、ちようど、その時、村井さんが、あの人の室からあたふた出てゆく後ろ姿を見たのです。

それからわたしは、自分の室へかえつて、みさちちゃんの室へ行つてみようかどうしようかと思つて、きき耳をたてていると、そのうちに、誰かみさちちゃんの室へはいつてゆく音がきこえました。それが、松木さんだつたんでしょう。わたしは隣からきいていただけで、

どなただったかよくわかりませんが、五六分もたつと、その人も出てゆきました。

それから、わたしは、誰にも見られなかったのを幸い、できるだけ気をしずめて、何事もなかったような顔をして夕方まで過ごしているうちに、神村さんが野球の帰りにあがっていらつしやるのにあつたのです。

殺そうなんて気は毛頭ありませんでした。つい、かつと逆上したあまり、あんなことをしでかしてしまったのでした」

.....

後記、この事件はだいたい以上のように落着して、植田欣子は過失致死罪として起訴されたが、山上が、あんなに容易に死んだことについては、医学者間に、ナルコポンの注射と何か関係がありはしないかと注目されている。

青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選2」【#「2」はローマ数字、1-13-22】〔論創ミステリ叢書2〕〕論創社

2003（平成15）年11月10日初版第1刷発行

初出：「新青年 第一一巻第九号」

1930（昭和5）年7月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

アパートの殺人

平林初之輔

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>